

3月11日に発生した東日本大震災とそれに伴う原発公害は、この科学技術文明社会の大きな推進力の一つである学問のあり方に深い疑問を投げかけるものでした。

たとえば、この間、「想定外」という言葉が頻繁に使われました。では学問にとって「想定外」の未来とは何なののでしょうか、また「想定内」の未来とは。このことと社会や国家、企業はいかに関係し続けてきたのでしょうか。

このシンポジウムでは、参加者みなで3月11日に照射される学問・教育・大学の姿を問い、「学問の未来」について議論し合いたいと思います。

【日時】 2011年9月17日(土) 12時半開場、13時～17時

【場所】 東京大学駒場キャンパス 5号館511教室

【参加費】 無料 (カンパ制)

【プログラム】

13:00～15:05 第一部 学問をしている身として

【発言順】 丹波 博紀、飯泉 佑介 (小括: 川本 隆史)

星埜 守之、川本 隆史、鬼頭 秀一 (同: 最首 悟)

長谷川 宏、最首 悟 (同: 丹波 博紀)

15:05～15:20 休憩

15:20～17:00 第二部 総合討論: 学問にとって未来とは何か

*進行具合により時間は変更される可能性があります。

【登壇者(敬称略/五十音順)】

飯泉 佑介 (修士課程・哲学)

川本 隆史 (教員・倫理学)

鬼頭 秀一 (教員・環境倫理学/科学技術社会論)

最首 悟 (元助手・問学)

丹波 博紀 (博士課程・思想史)

長谷川 宏 (哲学者)

星埜 守之 (教員・フランス文学)

*学生・教員は東京大学所属。

カンパのお願い : このシンポジウムを運営するにあたり、多少費用がかかっております。ただし学生の自主運営企画のため、その費用ですら十分にまかなえません。帰り際結構ですので、多少とはいわず盛大にカンパをくださいますこと、心よりお願い申し上げます。

登壇者プロフィール（五十音順）：

飯泉 佑介（いづみ・ゆうすけ）

1984年生まれ。東京大学大学院人文社会系研究科修士課程に所属、専攻はドイツ近代哲学（ヘーゲル）。幼少期をドイツのフランクフルト近郊で過ごす。国際基督教大学教養学部でハイデガーの哲学を学んだ後、3年間、都内の運送会社で事務員として働く。9.11とその後の「対テロ戦争」に衝撃を受け、地元の反戦運動にかかわる。また、学部生時代からサラリーマン時代を通じて、労働運動の支援などを行う。

川本 隆史（かわもと・たかし）

1951年広島市生まれ。「高校暴動」世代。1970年4月、大学進学のため上京。政治青年にも文学青年にもなれず、文学部に転じてカント倫理学を学び、ジョン・ロールズらの社会正義論に活路を見出す。女子大教師を勤めていた折り、「ケアの倫理」を打ち出したキャロル・ギリガンの『もうひとつの声』に強い衝撃を受け、正義とケアを兼ね備えた社会のあり方を構想するとともに、被爆をめぐる「記憶のケア」を通じて、「記憶の共有」の途を探るようになった。

東京大学大学院人文科学研究科博士課程を単位取得退学後、跡見学園女子大学、東北大学の勤務を経て、現在、東京大学大学院教育学研究科教員。

著書に『現代倫理学の冒険』（創文社、1995）、『ロールズ：正義の原理』（講談社、1997）、『共生から』（岩波書店、2008）、編著に『ケアの社会倫理学』（有斐閣、2005）訳書にアマルティア・セン『合理的な愚か者』（共訳、勁草書房、1989）、マイケル・ウォルツァー『解釈としての社会批判』（共訳、風行社、1996）、ジョン・ロールズ『正義論 改訂版』（共訳、紀伊國屋書店、2010）ほかがある。

鬼頭 秀一（きとう・しゅういち）

1951年愛知県名古屋市に生まれる。東京大学大学院理学系研究科博士課程単位取得退学。山口大学、青森公立大学、東京農工大学、恵泉女学園大学を経て、2005年から東京大学大学院新領域創成科学研究科教授。専門、環境倫理学／科学技術社会論。「現場」から立ち上げる環境倫理を構築しようとしている。三人委員会 共同代表、三富アライエンス 代表、荒川クリーンエイドフォーラム 理事。

著書に『自然保護を問いなおす——環境倫理とネットワーク』（1996年、筑摩書房）、『環境の豊かさをもとめて——理念と運動』（編著、1999年、昭和堂）、『自然再生のための生物多様性モニタリング』（共編著、2007年、東京大学出版会）、『環境倫理学』（共編著、2009年、東京大学出版会）ほか。

最首 悟（さいしゅ・さとる）

1936年福島県に生まれ、千葉県に育つ。東京大学理学部動物学科博士課程中退後、1967年同大学教養学部助手になる。1994年退職。恵泉女学園大学を経て、2003年から2007年3月まで和光大学人間関係学部人間関係学科教授。現在、和光大学名誉教授、予備校講師。この間、1968年東京大学全学共闘会議助手共闘に参加。1977年第一次不知火海総合学術調査団に参加、1981年より第二次調査団団長。

著書に『生あるものは皆この海に染まり』（新曜社、1984年）、『明日もまた今日のごとく』（どうぶつ社、1988年）、『星子が居る』（世織書房、1998年）、『水俣五〇年 ひろがる「水俣」の思い』（作品社、2007年）、『「瘡」という病いからの 水俣誌々パート2』（どうぶつ社、2010年）などがある。

丹波 博紀（たんば・ひろき）

1979年、千葉県松戸市に生まれ育つ。現在、東京大学大学院博士課程在籍。2004年に最首悟さんの和光大学・水俣フィールドワークに同行し、新作能「不知火」（石牟礼道子作）の水俣湾埋立地での奉納に加勢する。それが機縁となり、以来水俣から問われることをどうにか受け止め、またそれを問いにしたいと考えている。最首さんを囲む勉強会・最首塾の世話人も務める。

今回のシンポジウムは、4月10日の高円寺15,000人デモに心底衝撃を受け、翌11日、最首さんにかつて駒場で開かれていた連続解放シンポジウム「闘争と学問」を一日限り復活できないかと相談したことがそもそもの発端。

編集に関わった本に『水俣五〇年 ひろがる「水俣」の思い』（最首悟と共編、作品社、2007年）、『「瘡」という病いからの』（最首悟著、どうぶつ社、2010年）がある。

長谷川 宏（はせがわ・ひろし）

1940年、島根県生まれ。専攻、哲学。東京大学大学院博士課程単位取得後、大学アカデミズムを離れ、在野の哲学者として、多くの読書会・研究会を主宰する。また、38年にわたって続いている私塾・赤門塾は、ユニークな活動をもって知られる。

主な著書として、『ヘーゲルの歴史意識』（講談社学術文庫、1998年）、『ことばへの道——言語意識の存在論』（勁草書房、1997年）、『赤門塾通信きのふ・けふ・あす』（現代書館、1980年）、『黒田喜夫——村と革命のゆくえ』（未来社、1984年）、『同時代人サルトル』（講談社学術文庫、2001年）、『ヘーゲルを読む』（河出書房新社、1995年）、『丸山眞男をどう読むか』（講談社現代新書、2001年）、『日常の地平から』（作品社、2003年）、『高校生のための哲学入門』（ちくま新書、2007年）などがある。

星 守之（ほしの・もりゆき）

1958年生まれ。フランス文学者、翻訳家。現在、東京大学総合文化研究科准教授。専攻は、20世紀フランス文学、フランス語圏文学。

著書に、『ジャン＝ピエール・デュプレー——黒い太陽』（水声社、2010）、おもな訳書に、パトリック・シャモワズ『テキサコ』（平凡社、1997）、アンドレイ・マキーヌ『フランスの遺言書』（水声社、2000）、ジェイムズ・クリフォード『文化の窮状』（共訳、人文書院、2003）、ジュリア・クリステヴァ『斬首の光景』（共訳、みすず書房、2005）、ジョナサン・リテル『慈しみの女神たち』（共訳、集英社、2011）など。

また、最首悟・丹波博紀編『水俣五〇年—ひろがる「水俣」の思い』（作品社、2007）に、「砂田明という訳者がいた」を寄稿。

総合討論提題： 学問にとって未来とは何か

最首 悟（東京大学元助手・問学）

学問は、正義と森羅万象に対する愛によって、平和にして豊饒な人類社会の実現を目指す知的な営みであり、そのような営みをなすコスモポリタンのコミュニティーである。学問の示す未来は希望と変化可能に充ちている。端的に学問は人類の幸福を目指す理性的な営みである。子どもや若者に学問への誘いを語ろうとすれば、このようなメッセージになるはずだ。

現にマイケル・ポラニーは、純粋な学問の精神は、正義と理性に対する信念に基づいており、世界が学問（科学）を必要とするのは「何よりも善き生活の範例」だからだと言った。科学のコミュニティーは、一定の信念への忠誠と権威、異論の調停、個々人の自由および自発性と協同の目的との調和を保証しているのであり、たとえドイツの科学者であろうが、日本の科学者であろうが、その態度を共有している。科学社会は、理想的な、あるいは自由な社会組織の範例なのだ。

すでに半世紀以上前、まさにそのような科学を夢見た身には、大学の片隅でひそかに暮らせたらという謙譲な思いと、貧困と不正のない社会の構築への寄与という熱い思いは同居していた。ポラニーは、第二次世界大戦後の状況において、破壊的懐疑主義が新たな情熱的な社会的良心と結びついた、すなわち「人間精神に対する完全な不信が過剰な道徳的要求と結びついた」状態に対して、科学の理想の擁護に固執しなければならないとした。

ポラニーの攻撃は共産主義に向けられたが、1968年、この破壊的懐疑と情熱的な社会的良心は、学生という層によって、共産主義も大学をも攻撃し、解体しようとした。特に日本においては、ファッショも軍部もやらなかった暴挙という印象さえ生まれたが、大学、学問、科学、技術、研究、研究費、講座制、国家、祖国、資本、精神労働、企業が様々な組み合わせ、からみあいとして問われた。なかんずく学生不在の大学とポラニー的科学共同体の不在が問われたのである。

しかし、ハンナ・アレントは、17世紀に始まった科学組織を指して、「全ての歴史の中で最も潜在能力のある権力発生集団の一つとなっている」とした。自然征服のために自分たちの道徳的標準と道徳的通念を発展させてきた組織は、自らの活動のため、時計に代表される技術を開発し、しかもその結果には無関心で責任をとらない。科学共同体は人間関係の網の目の中へとは活動しないのだ。

学問・研究が客観的対象の仕組みを追究するかぎり、人間は主役とならざるを得ず、人間が人間に対して責任をとらざるをえなくなる。世界は無根拠化し、その中で人間は立ち枯れてゆく。自分で自分の首を絞めてゆく学問・研究に未来はない。

私はいま「問学を」と呼び掛けている。理性的な追究の結果として浮かび上がってきた「いのち」の認識不能性に対して、その不能性の根拠を問うこと、ならびに、その不能性を自明として、「いのち」をなおざりにして生きる、あるいは生きられるとは何かを問い続けることを問学としたいのである。

世界は世界内存在の人間にとって意味がある全体であり、自覚的無自覚的世界観に基づいて人間は人生を送る。世界と世界観と人間の間を問う理性的な営みを学問という、と言っても過言ではない。さらに学問は、世界の根源的なあり方、世界の発生・無発生について、端的に「なぜ」という問いを發し、答えを提出する営みと言ってもいい。

しかし17世紀からの（自然）科学は、「なぜ」という問いを「いかに」という問いにずらし、世界の物理的・化学的仕組み（からくり）の解明に的を絞った。その結果は無根拠の世界の必然的運行をベースとした、観測者依存の事象と予測不能の複雑系の招来であった。その探究の過程において、精密機器開発の技術が要求され、宗教改革、労働観の変遷と相まって、技術文明と、絶えざる競争を強いられる市場原理に基づく資本主義のなかに、科学が位置づけられることになった。

無意味化した世界の中で、競争、進歩のみに意味を求め、しかも納期という未来に縛られた技術成果主義は、人間に焦燥と強度のストレスをもたらし、生きもの全般に破壊的影響を及ぼす。「なぜ」と問う学問が消失したとすれば「問学」として復活させねばならない。

新たな枠組みが求められている。それは「いのちは世界」として提示される。世界内存在としての人間は分有の「いのち」である。いのちに包摂された「いのち」である。森羅万象はいのちに包摂された「いのち」である。いのちは分けられずわからない。言語（記号）をもってその意味を物語るのがいのち（世界）についての「なぜ」を新鮮にし、いのちの豊饒さを体感させる。森羅万象の「いのち」の仕組みを追究する科学は、「なぜ」を深める有力な営みとして位置づけられることによって、意義を回復するといわねばならない。